

大寺薬師に入る道を通称「やらじ坂」と呼んでいます、  
「やらじ坂」の地名には古来からの言い伝えがあります。

その昔、推古天皇(五九四)が眼病を患われた時に、出雲国林木の郷に靈験あらたかな祈祷を行う高德な行者智春上人という僧が居るといふ事が朝廷につたわり、天皇の眼病平癒を祈祷させるために勅使(天皇の使い)をさし向けられました。

勅使が林木の郷に着かれた時、智春上人は畑で働いて居られました。

勅使が来られた事を知った智春上人は、野良着ではおそれ多いとして「やらすの法」(前に進めない催眠の術)という法力をもつて、勅使を足留めにしておき、帰庵して法衣に着替えてあらためて対面されたといひます。

そして九十九折りの山坂を越え、奥の院浮浪の靈山(鰐淵寺)で祈祷された所、不老滝よりふしぎな靈水が湧き出しました。その靈水を天皇に捧げたところ、すぐに快方に向かわれたといわれています。その智春上人が、大寺薬師の開基の僧であります。

その「やらす」がいつしか「やらじ」となって、いまでも国道四三一号線から大寺薬師にいたる道を「やらじ坂」と呼んでいます。

また 別の一説では、般若経を広めようと遠い国から大和の国

に上陸してきた僧達が、十六島の浦から北山を越えてこの地に来たときであります。

荒れ狂っている斐伊川を渡ろうとした時、随行してきた十六島の浦人達が僧達の一行を止めることに懸命になったそうです。

この浦人達の真心を伝えて「やらじ」(前に行かせない)の地名となったと言う話が炉辺物語として伝えられています。

